

北の鉄道風景

Train number; 1938D

2023.7.23 11:26

1/250, f/8, ISO 200, f=140mm, Daylight/Sunny

5504×8256 Raw

第125回

五度目の審判

崩れやすい足元を何度か踏みしめてカメラを構えた。ファインダーの中にあるものが想定通りか、苦勞した割には他愛のないものか、想像以上の大当たりだったりするかが試される。撮影の最初の審判だ。写真は二次元の世界だから、現実とは文字通り別次元である。紙の上に最高の仕上がりを見せない限り、成功とは言えない。そこまで考えて

あの頃、シャッターは1回しか切れなかった。作品の成否も、フィルムを現像し、印画紙に焼き付けるまでわからなかった。それだけに撮影の醍醐味は格別だった。室蘭本線 1975



アングルを決めシャッタースピード、絞りを決めなければならない。ほとんどオート化された現代でも、撮影ではマニュアルが幅を利かせる。

さあ、列車が来る。列車の接近がわかるならともかく、山の上では木々が視野を遮り、蟬の声、風の音、沢の水音が聴覚まで遮断するから、シャッターに手をかけたまま動けなくなる。三脚が使えないような斜面ですつとこの姿勢はきつい。ちよつと体勢を崩した隙に列車がやって来る経験は何度もしている。不意を突かれて撮った写真は、高速連写のこの時代でもモノにならない





写真と文＝眞船直樹

い。この不動の構えから刹那を切り取れるかが二度目の審判。

二つの審判を通過した画像をカメラ上で確認して、気持ちよく下山できれば、まずはおめでとうということだが、自宅に戻って大画面のディスプレイに展開して確かめると、大概は、そこは詰めが甘い、ここは駄目だ、とうるさく注文をつける自分がいる。三度目の審判である。

写真原稿として編集部に届ける。一流の編集者だといかにも肯定的で優しい言葉を並べながら、私が適当に妥協した部分を突いてくる。ぐうの音も出ない。別原稿に差し替えることもあるが、そのひとことで成長した手応えを感じれば、かえって嬉しい感触が残る。四度目の審判。

写真が店頭に並ぶ。皆が見る。そこに映っているのは、私の視点で捉えた世界、つまり私である。撮影対象を見続けてきた私は、この時、見られる側になる。佐伯剛正のフォト・エッセイ集「撮ることは、撮られること」の通り、この五度目の審判が一番怖い。